

ブックガイド 身体へのまなざし

『心と身体といのちのこと』

神田橋條二・白柳直子著 LAP 出版 二〇二〇年

評者 篠崎 志美

臨床がどれくらい「わかる」ようになったらどう。

ライエントのいる風景ではなく、内なる自分自身の心であったと思う。

大学生のころ、恩師のすすめをきっかけにして神田橋條治氏の著書を読みあさった。印をつけたり連想を書き込んだりして一生懸命に読み込んだ。臨床家になると決意したがゆえの行動であったが、臨床経験のない若者がそこに映し見ていたのはク

だから「わからない」ところがあれば、悩むよりも先にあこがれを強くした。臨床現場に出れば神田橋先生の言葉が今よりも「わかる」ようになるかもしれない。そこには確かに未来との対話が存在していた。そして月日は流れて今・現在、毎日を臨

床現場で生きるようになったわけだが、どれくらい「わかる」ようになったのであろうか？

身体を立て直しと発達障害の関連を考えるようになり、〈心屋〉の神田橋氏に師事をして、診療の陪席を重ねるようになったそうである。この

本書は心と身体サービスの従事するすべての臨床家に寄り添う一冊である。著者は伝説の精神科医である神田橋條治氏と整体師の白柳直子氏である。本書によれば、白柳氏は〈身体屋〉として古傷の施術をするなかでトラウマと身体記憶の繋がりに着目するようになり、身体を立て直し、身体記憶を解放することでPTSDも改善する可能性を考

えようになったという。さらには

事とするすべての臨床家に寄り添う一冊である。著者は伝説の精神科医である神田橋條治氏と整体師の白柳直子氏である。本書によれば、白柳氏は〈身体屋〉として古傷の施術をするなかでトラウマと身体記憶の繋がりに着目するようになり、身体を立て直し、身体記憶を解放することでPTSDも改善する可能性を考

えるようになったという。さらには

るなかでトラウマと身体記憶の繋がりに着目するようになり、身体を立て直し、身体記憶を解放することでPTSDも改善する可能性を考

えるようになったという。さらには

志郎氏、精神科医の高宜良氏をむかえた座談会も収載されている。対談は、白柳氏が、神田橋氏の技術を残していくためには診断基準および治療技法の体系化が必要であると願い、診療場面で何を見て、どのように判断をして、何をしているのかについての具体的な説明を求めるところから始まる。そしてお互いを「かなり体質的には近い」と認め合いつつ、お互いの考えに対して「わから」と「わからない」を繰り返しながら対話が進む。したがって、本書は読み終えて直ぐに真似ができる〈心屋〉と〈身体屋〉の簡便な技法

や手わざを解説する手引書の類ではない。しかし、おふたりの「わかりあいたい」思いを軸としつつ、〈心屋〉と〈身体屋〉の同異を通じて、臨床のキモが明らかにされていくさまは見事としか言いようがない。読者は、おふたりの対談を追いかけけるうちに、次から次へとクライエントの顔が浮かび、ずっと疑問に感じていた謎が解き明かされて、心にストンと落ちるような体験をするのではないか。

対談の終わりは、とあることについて「わからない」で結ばれる。そして、神田橋氏は、白柳氏に対して、いまは「わからない」かもしれないけど八〇歳になったら「わかる」と予言する。この言葉は読者にとっての希望の処方箋にも思える。毎日の臨床は「わかりたい」から始まり、「わかる」と「わからない」、「わかってもらえた」と「わかってもらえない」の連続だ。経験年数が長くなるほどに気安く「臨床がわかるようになった」とは言えなくなる。臨床家とクライエント、お互いの心と身体の影響あいを使つて、自分と他者の間を行ったり来たり、〈抱えられ〉〈揺さぶられ〉ながら、それでもわかりあおうとする営みのなかに回復の手がかりがあり、臨床技術の向上があり、いのちの成長があるのかもしれない。何度も読み返したくなる本である。なしろ八〇歳になっても答え合わせの楽しみがあるのだから。おふたりの「わかる」ことへの追求は、二〇一八年にIAP出版から刊行された『神田橋條治の精神科診察室 発達障害・愛着障害・双極性障害・うつ病・依存症・統合失調症の治療と診断』を産み出している。本書と併せて読んでほしい。

(しのぎき・もとみ／福井大学医学部附属病院子どもこころ診療部)